

六花

11
.
12

俳句雑誌りつか
2012 (平成24年)
Cover Dress of Little Bird



おきなぞうおじたでねたらあかんぞうよ 一丁

CONFETTOから。金平糖⇨コンペイトウはポルトガル語で角の生えた砂糖菓子。エッセーの中に少し角を立てるのも面白いだろうと提案したところ、ことりは即答で賛成。100回続いた内容はほとんど家庭内の出来事で、文芸家が家族のプライベートを暴露していることは多くあることだが、家族の理解があつて自由に書けたはず。一番の犠牲はお父上で、掲句も父を題材にして創作していることも考えられる。だが作者も炬燵で寝入ることもあつたのだろう。関西弁の幼児言葉で表現したのが微笑ましい雰囲気醸し出している。このような俳句を「金平糖俳句」と自らは言っていた。出版社が金平糖俳句に目を付けて「絵本俳句」を出さないかとオファーがあつたがすべて断っている。

六甲

山田六甲

秋天を切り取る鳶や隠岐はるか
 いざなぎといざなみに鴨来たりけり
 曼珠沙華の中を流るる安やす来き節ぶし
 隠岐からの風に干瓢干す夫婦
 いてふの実拾ひきれさりふみもみす
 教室のたれかがむける青みかん
 たぶらかすためらはす風曼珠沙華
 来年は去年の再来年小鳥来る
 手をつかばガラスの破片月の浜
 くもの巣をやぶりて月を蛾のめざす
 つり竿で長刀払ひ曼珠沙華
 月の蛾の動かざること四半刻

赤とんぼ輪投げの針に止まりけり
とんぼうに飛来してをり輪投の輪
踏場なく団栗の木を見上げけり
棕櫚の葉をこまごまと吹く秋の風
薄情な風につかまりたる芒
尾がなくて月夜に踊ることもなし
命日を一日痒しすすき傷
陵の芒にまぶた切られけり
鈴虫に猫も吠ゆるよ一周忌
秋風の時折入り来一周忌
秋扇うなじに差して経を読む
朝寒や幸せな和田誠の字

瑞々し星のしづくの佐^さ用^よぶだう
売れ残りさうなへうたん南瓜買ふ
秋扇綻びかけてをるが良し
鴟が来てときには甘え声で鳴く
旗竿の軋めば里の祭かな
濠端へ秋の噴水はみ出しぬ
さざ波の立たぬ処も水の秋
噴水の玉秋水を走りけり
蜘蛛の囀を色なき風の抜けにけり
秋草の先で眼鏡を突かれけり
纏れたるままもまたよし蔦紅葉
漏斗なす秋の噴水広ごりて

羽根の浮くところへ桐の一葉かな
秋風の走り去りけり水の上
噴水の玉ほどけては澄みにけり
噴水の玉秋水に戻りけり
噴水の空落ちてきて澄みにけり
蜘蛛は巢をすぼめて秋の彼岸かな
ひと雨に露草は哀しみの色
草の花揺れつつ色の濃くなれる
あやとりのごとくに女郎蜘蛛の糸
貝殻で砂を掬すくはば秋の声
捨缶の貝殻色に秋日かな
貝殻の砂から秋日こぼれけり

手折りたる指の冷たき受珠沙華 藤生不二男

たおりたるゆびのつめたきまんじゅしゃげ ふじおふじお

秋つばめやがて光りとなりにけり

桐一葉落つる間際に流れけり

吊されしごとく浮かべり秋あかね

日暮るるに間のある木槿咲いてをり

曼珠沙華彼岸花を折り取ったとき驚くような冷たさを指先に感じた。その驚きを、曼珠沙華の茎が冷たかつたと言わず「指の」冷たきと表現したのがいい。曼珠沙華の茎に含まれている水分の冷たさではなく、精神的なゾクゾクとした冷ややかさを感じたから「指の冷たき」としたのである。曼珠沙華は過去に様々な言い伝えや迷信で忌み嫌われてきた。それが日本人に根強く忌み花として潜在意識になっていることが掲句を生み出したともいえる。この作品は難しい表現や漢字を使わずに出来ている。

仕舞ふもの一針かけて秋灯下 大内幸子

しまうものひとはりかけてしゅうとうか おおうちゆきこ

たをやかなな風も手折りて初芒

夕涼し猫の寄り合ふ外階段

新涼やおクスリ手帳新しく

河川工事花野を透かす測量士

秋から冬への更衣。筆箭を前に今から仕舞う夏物の着物や衣服の繕いか、皺や崩れを防ぐため一針仕付けをかける。それを秋の灯の下で背なをまゝめて行っているのだ、子どもの頃の母親の姿を思いおこす。日本の静かな夜長の主婦の過ごし方の一つである。読書をするとか手紙を書くとか趣味の絵を描くことで過ごすのも秋灯下であるが、そのような趣味ではなく、秋灯下で日常の家事を淡々とこなすのである。このような作品こそ、優劣を論じるよりも、深く味わいたい、真（まこと）の作品といえる。

雪 卿 集

夕 鴟

佐津のぼる

小鳥来て神饌の米こぼしけり
夕鴟や高き一樹に日の残り
強く掃けば残りてゐたる木の実かな
名月やいよよ濃くなる山の影
残る虫鳴かねばさみし鳴けばなほ

ジャワ更紗

笹村 政子

萩の花枝のうねりの中にかな
さきがけの白萩風に紛れけり
竹樋にかすかなひびき涼新た
秋扇捜すともなくさがしをり
初秋や母の形見のジャワ更紗

せつ じゅ しゅう
雪 樹 集

落 鮎
溝 潤 弘 志

鈴虫の鳴き声入りの電話受く
夜長かな推理小説読み尽くし
菊の鉢薔ばかりを買ひにけり
小太りの落ち鮎に串曲りをり
少し裂けなほ使ひをり秋扇

彼岸花
高 瀬 博 子

火の国の墓地に叢がる彼岸花
彼岸花柵田の空の澄みわたり
曼珠沙華柵田の畦を区切りをり
曼珠沙華ざんばら髪となりて散る
曼珠沙華見てゐて狂ふかも知れず

蛍雪譚 六甲

十一月号選後に

熱き茶をすすり涼しくなりにけり 志方 童子

毒には毒をもって制す、という言葉を思い起こす。暑いときに冷たい物を飲むのは常識。だが暑いときに熱い物を飲むと余計に暑くなるように思えるが、意外にも熱い茶を飲むと、その後涼しくなった。季節は反対だが、寒いときに水風呂に入ると、あとで身体がぼかぼかと暖かくなるのも同じ理屈。のぼるさんの作品と通じる意外性がこの作品にも言える。掲句も難しい漢字や言葉飾りが無い。その点も秀句の条件を満たす。古今名句や秀句と言われる作品は平明で深い。選者は茶を啜るたびにこの句を思い出すだろう。夢風撰候補。

生きてゐる実感の草いきれかな

草いきれとは夏、日光に強く照らされた草の茂みから起こるむっとした熱気。暑さの上塗りだ。が、その嫌な熱気も生きている証拠だからと自らを慰めているのだ。生きているとは息をしていること。その通り。生きている内が華でございます。

喉元のほか動かさず青蛙

面倒くさそうな青蛙。おそらく竜之介にペンキを塗られて、動いたらぼろぼろはげ落ちるのでしょう。いえいえ奥方様方のことではございません。(以下略)

六花集

ど 絵 食 山 月
 ん 模 卓 頂 高
 よ 様 に に く
 り で 何 輝 幾
 と 選 時 く 重
 広 び も ば に
 が 出 置 か 流
 り し き り る
 ゆ た あ り 雲
 く る り 秋 雲
 や る り 秋 入 明
 鯛 秋 秋 入 日 し
 雲 扇 扇 日 し

吉田優美子

鯛 べ 地 鳴 奥
 に ら 図 き 須
 は 釣 描 な 磨
 灸 の り く が の
 の や ら 四
 あ と 船 ふ 旋 阿
 と が 頭 せ 回 に
 が ひ 以 きの して
 い 外 如 くの 蟬
 ふ 皆 く 落
 う 無 蝸 ち
 み 無 口 牛 ぬ
 い 口 牛 ぬ

赤松有馬守破天龍正義

寂 眼 秋 技 夏
 し 裏 篠 芸 草
 さ に の 天 に
 の 御 山 拝 秋
 暑 仏 門 す 篠
 さ お 出 背 川
 極 は れ 中 の
 ま す ば を 細
 る 青 青 伝 み
 と 田 青 伝 み
 き 田 青 伝 み
 極 か 田 風 汗
 む な 風 汗

平居滯子